猫主様

三浦 幸子

尾道の町に千光寺という寺がある。山の上の方に建っているので、参拝客はいるものの、辺りに民家はほとんどない。唯一近くにぽつんと建っている家は、この港町にはほとんどいない山の仕事をしている男のものである。男にはお春という可愛らしい娘が一人いた。

お春には兄弟がいなかった。近所に同じ年頃の子供もおらず、いつも一人ぼっちで遊んでいた。お春の母親はすでに亡くなっており、父親はまだ幼いお春を構ってやれないことに心を痛めながらも、食い扶持を稼ぐのに手一杯だった。それでもお春は「寂しい」とも言わず、労働に疲れて帰ってくる父親を夜遅くまで待っていた。

お春は口数の少ない子供だった。七つになったというのにたいした人見知りで、父親以外の人間とはほとんど口をきかない。お春の唯一の遊び相手は猫であった。この町には猫が多く暮らしており、いたるところで彼らに出会うことができる。千光寺に住み着いていた黒猫が、ごくたまにお春の家に現れるのである。お春はこのお客が来るといつも飛び上がるように喜んで、煮干

しをあげたり日向ぼっこをしたりして
遊んでいた。

ある日の夜遅く、父親が家に帰ると、お春が笑顔で待っていた。お春の笑顔を久しぶりに見た父親は喜んだ。

「お春、何かいいことがあったんかい？」

「うん、おっとう、うち、友達が、で、きた」

口下手なお春から友達という言葉を聞いて、父親はさらに喜んだ。その日以来、お春には少しずつ笑顔が増え、口数も多くなった。友達の名はお珠という、とお春は言った。お春は毎日、初めての友達の話を父親にし、嬉しそうに笑った。今日はお珠と山葡萄を取りに行った、今日はお珠と日向ぼっこをした、などと一生懸命話した。

父親も娘に初めてできた友達に会いたかったが、暖かいお昼にしか来ない、と言われた。

「お珠ちゃん、は、水が嫌いで、こんな小さな、水溜まりも、怖がっとるんじゃ」

「お珠ちゃんは、色んな、抜け道とか、陽だまりとかを知っとって、すごいんじゃ」

「お珠ちゃんは、足が速くて、あんな高い木にだって、登れるんじゃ」

きゃっきゃと笑いながらお春はいつもお

珠のことを語っていた。

「お珠ちゃんの、目は、キラキラ、光って、

きれい、なんじゃ」

寒い冬が終わり、草木が芽吹き始めたある日のこと。父親がいつものように夜遅くに家に帰ると、お春の姿がなかった。今までお春がそんな遅くまで出歩いていたことは一度もなかったので、父親は慌てて家を飛び出した。山の上にぽつんと建っている家を出ると、辺りは明かり一つなく、闇に包まれていた。お春を探そうにも、彼女がどこにいるか見当もつかない。父親は焦って辺りを見回した。すると、暗闇の中にぼんやりと光が二つ見えた。その光はゆらゆらと緑色に光りながら、こちらに近付いてくる。

父親は目を凝らしてその不思議な光を見つめていたが、その正体がわかったとたん真っ青になった。黒猫だった。夜の闇に同化してしまうほど、猫の毛色は黒い。緑色に光る目と白くとがった歯が、ぼんやりと浮いているようだった。異様なのはその大きさだった。緑色の目は男の腰ほどの高さで光っている。体の長さは男の身長をゆうに超えていた。その先に見える黒くしなやかな尾は子供の腕程太い。近付いてくる猫の目は、徐々に大きくなっていく。獅子ほどもある黒猫は、口になにかをくわえて引きずっているよ

うだった。暗闇に目が慣れてそのくわえられた物体を理解すると、父親は息をのんだ。黒猫は、女の子を引きずっていた。ボロボロになった襟元をくわえて、ズルズルと引っ張っている。

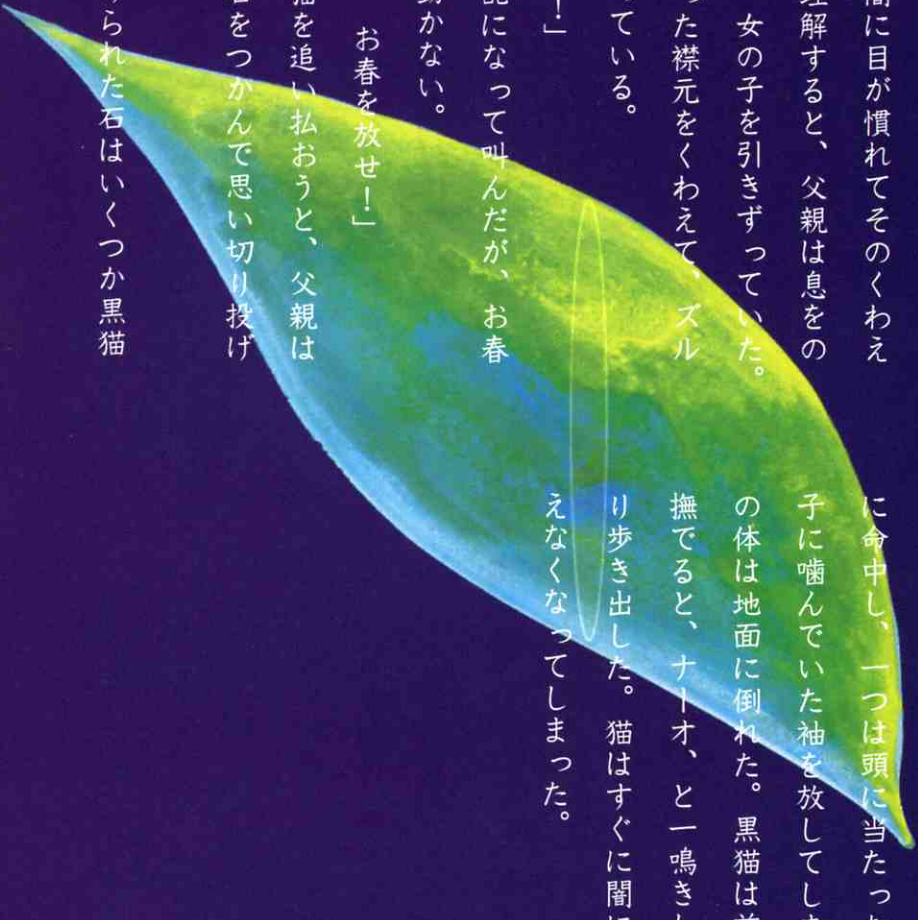
「お春！　お春！」

父親は半狂乱になって叫んだが、お春はピクリとも動かない。

「化けモンが！　お春を放せ！」

なんとか黒猫を追い払おうと、父親は足元に転がる石をつかんで思い切り投げた。

勢い良く投げられた石はいくつか黒猫に命中し、一つは頭に当たった。その拍子に噛んでいた袖を放してしまい、お春の体は地面に倒れた。黒猫は前足で顔を撫でると、ナーオ、と一鳴きして振り返り歩き出した。猫はすぐに闇にとけて見えなくなってしまった。



手当をされ目が覚めたお春は、自分の身に起こったことを泣きながらぽつりぽつりと喋った。今日いつものようにお珠と暗くなるまで遊んでいたお春は、突然桜を取りに行きたい、と思った。お春の家のある山は、あまり知られていない桜の名所が近くにある。この時期になると満開の桜が嵐のように辺りに降り注ぎ、幻想的で美しい情景が広がる。お春は、危ないからやめよう、と止めるお珠を強引に連れて行ったという。遅くまで働く父ちゃんに、花びらだけでも見せてやりたかったんじゃ、とお春は父親の腕の中で泣きながら言った。暗くなりかけた山道をお珠と二人で歩いていると、お春は足を踏み外し、斜面を転げ落ちてしまった。お春の意識はそこで途切れてしまったらしい。お春の体にできた傷は、転げ落ちたときにできた擦り傷ばかりで、巨大な猫に噛まれたような傷は一つも無かった。

夜が明けても昼になってもまた夜がきても、父親はお春のそばについてやった。長い間そばに父親がいることが嬉しくて、お春は幸せそうに笑って眠っていた。随分夜が更けたころ、父親は戸口で小さな

物音を聞いた。お春を起こさないように静かに起き上がると、扉を開け外を見渡した。そこには、ここまで届くはずのない桜の枝が一本、地面に置かれていた。拾い上げると、美しく咲いた花びらが数枚、ふわりと父親の足元に落ちた。

「おーい、お珠ちゃん！　さっきは悪かった！　また、お春と遊んでやってくれなあ！」

父親の声が静まり返った山に響いた。父親は、夜の闇の中に、二つに光る緑の光を見た気がした。